



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

「スピリチュアル・ツーリズム⑤」 行為と沈黙

セントラル駅から、とにかく歩いて歩きまくった。途中雨が降ってきたが、それでも歩いた。歩くことは街を知ることだ。バスや電車よりも街の雰囲気を知ることができる。

シドニーは美しい街である。ジョージ・ストリートを北に進むと幾つかの教会がある。代表的なものはセントアンドリュース大聖堂である。1819年の着工で最も古いものである。しかし、ここには入らなかった。途中で新しい教会や庶民的な教会に立ち寄り、静かに座り歩き疲れと心を静めた。観光客は来ない。

(この沈黙・静寂がスピリチュアル・ツーリズムの醍醐味だよ)

有名な教会を避けたわけではない。シドニーで代表的なセントメリーズ大聖堂も訪れた。1821年に建造され60年の歳月を費やして完成した。カトリックの神父が布教にきたのが1820年というから最も古いものである。

「荘厳な雰囲気に包まれているスケールの大きな堂内に入ると、身の引き締まる思いがするはずだ」(『地球の歩き方』)

(いや、引き締まらなかったぞ！)

中国人観光客がわんさとやって来て、まるで博物館かテーマパークだ。前述したように、スピリチュアルなものを求める人は普通の教会に飛び込むことをお勧めする。

セントメリーズ大聖堂で気づいたことが一つあるので読者諸氏にお伝えしておく。

聖堂の奥に祭壇がある。聖母マリア像の左右に4名ずつ聖女が並んでいる。右端に見慣れた尼僧がいた。マザー・テレサである。

(はやい！)

マザーが「聖者」に列せされたのは昨年(2016年9月5日)のことである。ちなみにミトラ城の肉丸は、巡礼団を引き連れてバチカンの列聖式に参列した。歴史的な儀式で、しかも特別席だ。

(本当はわが輩が行きたかったが、若い者に譲った)

わずか3ヶ月で祭壇に祀られたことになる。マザーが増えたのに左右4名のバランスをどうしてとれたのか。疑問符である。もう、これはマザーの奇跡かも・・・。

1820年というと、日本は江戸時代後期まだ鎖国中であつた。もちろん切支丹邪宗門厳禁が

継続していた。

話は逸れるが、「サイレンス」という映画を観たかい。原作は遠藤周作の『沈黙』である。“神”は実在するのか、考えさせられた。

裏切り者ユダはイエスをユダヤ教徒とローマに引き渡した。そのユダにイエスは言った。「去れ、行きて汝のなすことをなせ」（ヨハネ福音書）

この言葉にはさまざまな解釈がある。信徒・司祭として、神学者・哲学者として、それぞれが自分流の解釈をしている。

遠藤は小説の中で次のように語っている。

「主よ。あなたがいつも沈黙してられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」

「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか」

「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」

（超訳：汝を見放していたのではない。汝が苦しんでいたように私も苦しんでいたのだよ。常に私は汝の苦しみとともにある。汝はすでに赦されているのだ）

哲学者の解釈はどうか。

「将来を思い煩うな。現在為すべきことを為せ。その他は神の考えることだ」

（アンリ・フレデリック・アミエル、1821-81）

この解釈は、インドの聖典『ヴァガバッド・ギーター』のクリシュナとアルジュナの対話を彷彿させる。

インド思想からすれば解釈は一つといってもよい。許すも許さないも宇宙の摂理からすれば、人の力など“無”である。それゆえ今為すべきことは、“結果”を考慮することなく為すことである。

遠藤の『沈黙』は神の沈黙、形而上学的な沈黙だが、インドには現実に沈黙の人が結構いる。山奥で何十年も沈黙をする行者に会ったことがある。また、ガンディーの高弟ヴィノバ・バーヴェ師に二度目にお会いしたとき、師は沈黙の行をしていたので筆談で会話した。ラマナ・マハルシは沈黙の聖者として有名である。

さてさて、今我らが為すべきことは、とりあえずスマホ“文字会話”は止めること。車中では読書をしよう。さもないければ、沈黙を！